

地間に撫育せらるる者なれば天地の理も背きての身を全ふする譯の無い善を作せば福し悪を作せば災するの勿論自然の道にてある古人の語にも人の善あるを人は欺く可けれ共天欺り共又天聞けども静にして音なし共云てあり頓と隠しも包もならぬ者也其道理の見へぬから私欲我欲の不實が出来る之か盲目と云者能く其道理に目が開て見ると忠良誠實に暮すのも約る所は吾身の爲と思ひ正直に暮す身となつたか之か心の開化と云もの朝廷より人間の道と萬民に諭せよと仰せらるる眞の良民としたいと思召す去り乍ら此目か明く様で明かぬ者にて兎角人情に覆れて人を欺き眼前の利に目か付て實の天福を待身に成り兼る者にて有る是れか朝廷の御胸の痛む所也之か爲め文部省を置くせられたる事なれば機兼して禍を招くより機樂に天福を受けるか好い』此一段抑揚法頓挫法を採て以て次段を明哲するの伏線と爲す

評ニ曰ク此一段百尺竿頭一步ヲ進メテ横説ノ處

釋迦牟尼如來も淨土の衆生の、開化し易しと御説と成さきて、此土の教の惡俗に留しめて、開化し難しと御歎と成され、佛法の上ての開化せずして、閉塞とて閉塞ひて有ると疑と云、疑を疑无明共、疑闇共、云て、都て法の道理の分からぬ、疑ひと云者にて有る。

此の疑ひに二ツありて一にの見疑二にの疑蓋此の見疑と云ひ死ぬる機とも乍ら、機に掛らす、落る地獄か有るのに、何共思はずに居る人の事也、今落る身を持ち乍ら、何共無しに居るのに、知らぬからの事也、往來に陷阱か有りても盲目の恐氣なりに向へ行く落るまで何共無ひか、實の見へぬからの事也、其代り、候つた時、一時に後悔する、是を大經より心中閉塞意不開化大命將終悔懼交至と御説被成てある、然るも此坐の同行の落ぬ先より、落る事に機か掛り、死なぬ前より、死ぬる事の案事られ、とうとう此坐へ出て來たは、一分開化したのいやぞよ、見へて來たのいやぞよ、落る迄知らずに居た者の、今から心に掛り出したの、調熱光れ月の光りの有るこそ、大病人か大病を知らずといふ古人の語も大病を知らぬ程の大病で、醫者が戀しうも無うつたか、大病人と知られて、見れば、醫者か手寄となる落るを、落ると知らなんど問は御助も戀しう無つたう、落る身しやと、明か知られて見れば、彌陀の喚聲が戀しうなる、偕て二に疑蓋と云ひ此の御助けを聞た上て疑ひあるを疑蓋と云ふ是れ機が淺問敷うなれ、往生も如何と思ひ、少し喜ひうあきば往生も、成るふと思ぬ機の善惡に拘り、已か罪福に目の付く人で

ある』此一段波瀾筆法  
共に對備はれり

夫を今吾高祖の、不了佛智の驗しぢやと仰せらるゝ、佛の心か見へぬうら吾機の善惡よ  
目う付くのトや、善知識の教よりて彌陀永劫の不思議力を以て助け在す、御謂れハ、  
即ち今の南無阿彌陀佛也と、能くく、六字の御手柄か、開開られて、見れば、最早案事  
様、道理ハ無ひ、往生は一定と、夜の明たか、御慈悲の疑ひの目の明たのしや、昔の案事  
う今の安心と變り、御恩、喜ぬ身と成りたか、明信佛智の同行也、王政維新の良政に逢ひ、  
文明開化して見れば、美しくしき、皇國の民となり、外國迄も譽れを擧げ、善知識の御化導  
は逢ひ、明信佛智と開化すれば、其場を去らき、正定聚、三世諸佛に譽れを擧げる、身と  
なる故、釋迦如來も、之を廣大勝解の人と、御譽を被下る事にてある』  
此處取結言向は盡きずして止むるの狀あるは却て妙味あるを覺ゆ

第六章

法話門

(其一)

火車の説

評ニ曰ク大  
地獄山鳴リ谷  
響ス

淨土の法、門内にて常に説く所の迷悟染淨の中間を弘誓の船と談し、又火車罪人を載て  
地獄に引致すと云ぬ者を或は之を畫きて鐵車罪人を載せ牛鬼之を挽くの圖を作る、此  
圖や此説や未だ佛理に指を染めざるの無宗教者の眼孔より見、耳根より聽く時は之を  
貶して癡暎の翁媪を嚇嚇するの具とし、啻ふ意を止めざるのみならず、遂に吾佛理を併  
せて棄るに至る者無さを保せざる可らず、豈肯て辯を好むに非ざるも余か此説無かる  
可らざる所以也』  
此一段起首

評ニ曰ク此  
處車字火字  
ノ曲敷故チ  
精ス

元來車とは往昔黃帝始て車を造る故に名けて軒輅氏と號すと、大平御覽第七百七十二  
卷にあり淮南子に蓬の葉の風に飄されて空に轉するを見て車を發明すと云ひ、御覽の  
釋名に車と舍なり行く者の處する所にして舍に居る若き也と云へり、是に於て手知る  
車ハ此より彼に至るは暫らく行旅の舍とするの物の名也即ち物を載運する器械の名稱  
のみ、又火車の言、北史に高岳攻穎川飛梯火車盡攻撃之法又新唐書第一百五十五卷列傳  
第八十馬燧傳に燧乃推火車焚朝光柵と見ゆれと今ハ此火車の謂ハ非ず』  
此處目を舉て綱を張る  
火とは佛者煩惱を喻曉するの套語にて、心苦と惱と云ひ、身苦を煩と云ふ、常には該稱

評ニ曰ク宛  
然機土ノ好

評ニ曰ク此  
處火字車字  
層々連下シ  
テ先ツ姿チ  
取ル

して身心の苦を俱に煩惱と稱呼す、乃ち諸佛集要經第三に「貪火極洞然何不生驚怖。尼  
 乾子經第六の貪心如野火熾然不知足。正法念處經第五の欲心猶如火焰。長阿含第一大  
 本緣經の一に「不爲煙火之所燒然又不爲欲火然。法苑珠林第九十に大莊嚴論を引て身  
 如乾薪膜悲如火未能燒他先自焦身と述へ、終南大師の毒害火と禮讚に示し瞋嫌の心能  
 く功德の法材を焚くと教へ煩惱を火に譬況する事經に論に故擧に違非を涅槃の聖行品  
 七之三には是諸外道無明所覆遠離善友樂在三界無常熾然大火之中而不能出と直に無常  
 を火に喩ふ又地獄道の事を恒に火途と説く之れ三途れ隨一にて謂ゆる三途の火途瞋恚  
 刀途(貪欲)血途(愚癡)の三惡道也村翁野畑も亦雅に言ふ死出の山三途の川とい是也、此  
 山とは川の源を指す者にて即色身を山とす依因也川とい心法にて因る也死出の山に四  
 大の山の訛りにて此肉身乃ち地水火風の四大の和合聚の山也此生有現界の四大の山を  
 脫離して心識始て中有の幽界に赴んとする相を四大の山を越ると云ふ三途の大河三途  
 の黒闇、此四大に胚胎す竊かに觀察すれは現前生有の四大焰々たる火途也火車也死し  
 て始て談す可き者に非ず觀無量壽經の説相就て看る可し地獄の猛火面前眉を燃く者有

らん」第六段に照  
應す

觀經下品生中說猛火變爲清涼風等其證也とす嗟呼地獄の猛火を目前の證也と斷言する  
 何の疑ふ所か之有らん、看よ諸彦この目前にて忿怒一度現し貪瞋互に競ふ事有と、佛世  
 尊の慈眼より此れ是を照覽せば焰々然たる地獄の猛火に非ぞして何ぞや、宜なる哉煩  
 惱の煩の字面に火を潮するの象ち火に双ひ負ふ音也、是れ余が火車の火と云者是れな  
 り」此處幹  
 旋法

車とは輪回の義ひて十二因縁を基として六道の死生を循環するを謂ふ心地觀經第三七  
 に「有情輪回六道猶如車輪無始終。南本涅槃會疏二本(四十)に付往來流轉猶如車輪と  
 云ひ摩耶經上(三)衆生輪轉五道疾於猛風と云ふも車の謂也昨日(過去)今日(現在)明日(未  
 來)と移り往き盛者必衰生者必滅、花飛ひ葉落ち鳥啼き水流れて、時須臾も止らざる無常有  
 爲の事たるや世親尊者は俱舍論に生住異滅の本相に上に一相宛ふ亦生住異滅の隨相を  
 示玉ひ之を近く喩ふれば燭火の焰と異ならず炷の本より生々熄す炎の尖末亦死々して  
 休ます其際の一穗の光焰も猶沈思諦觀すれば分々抄々生住異滅成らざるは無し此刹那

評ニ曰ク此  
處以下火車  
無常大鬼ノ  
六字照應シ  
テ雲ヲ呼ビ  
雨ヲ呼フ伏  
線之妙アリ

々々の生滅の相續して息ざるを凡夫認て常住の看を做す哀れなる哉凡夫の看を常住と  
なす物是れ無常虚假の旋火輪にて、夢幻泡影も音ならず此本涅槃の高貴徳王菩薩品  
に人命不停過於山水と説き空海の秘藏寶鑰に生れ生れ生れ生れて生れの始ふ暗し死に  
死に死に死て死の終りに冥しと云ふて三界五道何處か生滅輪轉地成らざるを此の有爲  
無常を稱して大鬼とす一切有部毘奈耶の三十四に無常の大畢鬘髮張口長舒兩臂抱生死  
輪と有りて無常を大鬼とす」此處關  
鬼とは近く云へは佛の反對なぞ佛を涅槃法性と云ひ常住と云ひ寂滅と云ひ无爲と云  
ひ淨樂と云ふ乃ち無衰無變不生不滅の覺位也之に反するの大鬼成れば無常也苦也有爲  
也乃ち肇論に夜半に力有る者あり乾坤を負て走り日月を狭て飛ぶ是れ何物ぞ強て名て  
無常と云ふ者是也淺近に談れば慈悲も情けも無く貴賤依正の論なく只管に滅壞を促す  
を職とする漢を無常の怨敵とも云ふ也彼の不死の藥を求し秦皇漢武も空しく去りぬ唯  
悲風の驪山杜陵の麓に咽ふあり武勇の策ことに長せし樊噲張良も名とのみ殘せり未だ  
遷變有爲の怨を防ぐ弓箭有事を聞す綺羅三千も空に老たり漢李唐楊の織やう成りし姿

評ニ曰ク此  
餘曲折

評ニ曰ク此  
處伏線

も一聚の塵と成りぬ付法藏の聖賢も悉く隠れぬ有智高行の聖人も是く去ぬは無常の殺  
鬼也と云へり」第三段に  
嗟呼終身の營々屠所の羊の歩々に命數の縮まる者と毫も異ならず吾人名も利に東奔し  
西走し將來餘慶の因種を抛棄し自ら害し甚しきは又他をも害するの徒無きに非ず人生  
百年の生涯の道中なり故に俱舎に世路と説く己行と(過去)正行と(現在)當行と(未來)の  
性成るが故に或は爲無常所吞食と云へり舊俱舎にも無常所食と説て既に火車と誨へ恒  
お鬼の餌と示す所の張本なり參聽の人々幸ひに自から己れか能を思量せよ日々の云爲  
六根の動作總て貪嗔痴に基ひせざるはなし佛眼より哀愍苦傷の觀察を下さば何んぞ  
火車上具縛の人と云はざるを欲せざるも得可らざる也逝く者は夫れ斯の如き乎百年の  
日子も之を分拆思考すれば出息入息去て又返らず孰か無常殺鬼の進載を免んや烏部山  
の煙峰も登り麓にも立つ我も何日其數に入ん仇し野の露朝たよもき夕にも落誰迎  
も他所にやと思ふ可き現前の市街村落何れの時か火車成らざる何の處う火途成らざる  
企望する所の參聽の人々俱に三毒を遠離し道德を修められん事と常住涅槃の妙域を志

評ニ曰ク此  
處伏線

評ニ曰ク此  
處波瀾

評ニ曰ク段  
ヲ追テ叙シ  
去リ論ヲ來  
レテ一絲紫

求せずんば同く是れ火車上の旅人ならんのみ迷ひ迷と知らせ大覺の後始て迷を知る車  
上翻つて車上を認得せざるは車は舍也とて行くもの處んする所なれば也百年の世路  
も盡るの日なかる可んや火車の當頭此を去て地獄豈疑有らんや暫く火車の喩体を指陳  
し佛理の萬一を髣髴して余が自から警覺する所を敷演して聊か以つて參聽の人々に告  
く』収結の處

(其二) ○輪廻流轉の法話

三界流轉生死の惑業とい明然たる大虚空に時來到自ら一片の雲を生し雨を降すか如し  
有よして有に非き空にして空よ非き妙其中に有り抑も眞如界の中には生佛の假名を絶  
し平等慧の中には自佗の形相無し若一念僅か萌動する時の萬境波自ら起り妄念此に  
感し境界彼れに應き鏡の影を現し鼓の聲を生ずるか如し邪正善惡の念に隨て好醜の形  
影必を應じ十法界の依正森々然として現き經に云く三界唯一心心外無別法又曰く應觀  
法界性一切唯心造とあり抑も直如性空の體性の水の如く無明妄心の動相は波の如し深

評ニ曰ク悲  
兩慘風言外  
ニ溢ル感概  
万疊轉々悽  
然

評ニ曰ク此  
處十二因縁  
ヲ説キ出シ  
テ前言ヲ轉  
換ス奇想々

義宜しく須く研究す可し其生死の惑業たるや情縁に繫縛せられて骨肉を貪戀し妄りよ  
入我を認めて勉て恩怨を修し清歌妙舞品行邪絲意を娛りめ愛着を發し水陸の群生を  
烹て以て甘旨と一口腹を養ひ惡口綺語兩舌妄語貪瞋癡愛皆是生死流轉の惑業也』此一段  
主法  
蓋し一心の全体性を離れて物に應し外の善惡邪正是非得失に對して心の作用ある也  
悉く唯因縁和合のみにて其實体無く其主宰無く朝より暮るに至る迄業相又役使せられて  
自のら自由の分なく生より死に至る迄業相に役使せられて自ら自由の分無し悲ひ哉隨  
處に主と也到處に解脱する事能はざる其生死輪廻の行相を攝し之を十二因縁と云ふ也曰  
く一には無明是れと過去一切の煩惱を通つて無明と云ふ未だ曾て知恵有ざる故也二に  
の行是は無明より業を生ず善不善の業能く世界の果報を作るが故に名けて行と云ふ三  
にの識是と行より垢心を生ぜ身因犢子の母を識る如く自から相知るを識と云ふ是則ち  
父母交會の時男子の母に愛を起し女子の父に愛を起す了別の識なり四にの名色是は父  
母赤白二滴和合して托胎するの色陰也五には六入とは眼耳鼻舌身意の六情根を成する  
也六にの觸とは根と塵と識を合するを觸と云是は生れて二三歳の時也七には受とは外

評ニ曰ク此  
所詞氣深闊

の六塵内の六根に觸れて苦樂を領納する也五六歳より十四五歳に至るまでの形勢也八  
に愛とは受の中より愛心執着の心起る也九には取との渴愛の因縁より四方に馳求す  
増上の愛著を生ずる也十に有と云ふの三業に經て種々の業を作り業惑の因を成就し  
因能く果を有持する事を結するを云ふ也十一に生とは有より還た後世の五陰の報身  
を受くる也十二に老死とは生あきり必ず死あり五陰熟壞し種々の憂惱を生ずる也是と  
生死流轉惑業の相と云ふ嗚呼悠々たる三界流轉の人苦樂心を縈し生死念を結ひ解脱の  
妙門有るを知らず朝より夕に至り生より死に至る迄念々作々惑業苦に使役せらるのみ  
悲ひ哉』此一段  
客法

深信の人の是に反し十善を心とし六度を行と日々怠らざる者は念々彌陀身心寂光此  
座を動せずして善業成就し往生極樂なる者也人々宜しく善業を相續す可し種子生現行  
々々薰種子爲正と相續して窮る事なければ人々善業を相續して以て流轉の惑業と輪廻  
の苦惱とを斷盡する事を勉む可也』此處  
淺合

(其三) ○極樂地獄の法話

夫因果報應、極樂、地獄は佛家の常談也然して世の撥無因果の徒は往々之を無しと罵り  
て曰く佛家極樂地獄を説く皆是れ寓言也大に愚爺痴癡を誑欺して設りに財施を貪求す  
るの姦計のみ人死すれば形体斯に敗滅し魂魄飄散して燈火の吹滅するか如し何そ人の  
死して極樂又生れて歡樂を受け地獄に入て苦楚を受けるの理あらんや司馬溫公も亦曰く  
死する者の形と神と相離れ形ち則ち朽腐消滅して木石と同じ神の則ち飄として風の  
吹り如く何處に之く事を知らず是思はざるの甚し死者は非すや不染居士曰く天地の  
道對待せざる者無し陽有れば陰有り晝有れば夜有り暑有れば寒有り乃至明有れば幽有  
り人有れば鬼有り皆な自然にして備はる以て焉を偏見す可らず都邑の人の聚まる所冥  
府の鬼の會する所豈に啻に人寰のみ有りて而して鬼室なからん哉幽明郷を異にす人事  
を以て鬼道を測る事を得されど是必然の道理確乎たる定論なり日本紀神代卷又黃泉に  
入て底根國に適くの語あり藤兼良公指て以て地獄とす中臣祓にも亦根國底國の語あり  
豈に誣妄ならんや皇國神代鴻荒之世我が佛教未だ東來せざる時己に冥府を言ふ以て明

評ニ曰ク東  
野爪ヲ現シ  
西雲麟ヲ出  
シ妙ヤ



評ニ曰ク憂  
然語ヲ止ム  
ルハ却テ餘  
来レハ悟了シ  
ル者ア

ける人あればこそ實に佛教も必要にして又佛教の因果應報極樂地獄の實有成る事を談するなれ若し夫れ正見正知の人計りならん又は佛教胡爲れを極樂地極を談せんや況や因果應報れや」此所 結束

(其四) ○不惜身命の法話

夫れ人身は金石に非ず安を能く長しなへに持たんや人命の草頭の露の如しと云ふも猶は時を延るに似たり出る息入らざれば乃ち後世に属す一念し錯まりて便ち六道を輪廻す佛教の廣しと雖も其法要の生死を越るの外なし必らずしも生死無常彌陀の大願忍かせます可らず日々に來迎を持って往生の運き事を歎き夜々又佛名を唱へて凡身の久き事と恨み又の生を貪り死を怖る事と得ざれ」起首破 題法

十住毘婆娑論に云く死を待つ事愛客の如くせよと又經鈔に云く燒天を待つ商客の鷄鳴に驚きて猶喜ぶ淨土を願ふ佛者の病患を得て偏へに樂しむと又永觀の捨因に云く病の衆生の善知識也と又疑問鈔に云く死と怖れ生を貪ばる事と得ざれと疑者將た云はん我

評ニ曰ク經  
論ヲ引キテ  
敵ヲ破ラセ  
テ奇想ヲ  
行ス

評ニ曰ク此  
所圓轉周旋

れ未だ思の如く如説の修行を爲さず若し露命なくんば安んぞ其志しと遂くるを得んやと或は云く度生の願未だ半ばに到らず我れ猶ほ世に住せば其寺を興隆し其人を引導し社會に利益を與ふ可いと余之み答へて云ん此は是れ巧みに語句と佛法を寄すと雖も心の實に愛我に有と未だ佛法の道理と明にして而して自利々他の大願を起せしよ非す故に其言皆戲論に屬す凡そ諸法の自性無し必らず衆縁に隨ふ若し因縁有れば縱令生を隔つも必らず自他の行願を遂ぐ可し若し因縁少薄なれば千年の長生を得る共願行成就し難たし淨佛國生成就衆生の菩薩の大願也無盡の法界を以て國土となし無邊の衆生を以て所化となす可し何んぞ一寺一類の衆生に限りて夫れが爲す身命を惜む可きや」此一段開闡法 又設活法

然りと雖も尙ほ息の出入する間は暫時も措かず衆生を教化し共よく安養を期するは是固より佛子の道なれば彼の二乘外道の徒が唯其自安のみを計り妄りに灰身滅智を願ふが如き非法を爲せよと云ふは非ざるなり」破題法を以て起り 警策法を以て終る



(其五) ○妄語の法話

評ニ曰ク妄語ノ二字本

世に妄語と云ふ者有り蓋し妄語とは妄想心深重にして業障に覆蔽せらるる者の道に對して不眞實を吐死及自己の公欲を便役せられ他人を欺んとて妄りに作る言葉也然し此妄語と云ふ者の一時の欲を充し私しを足らすに甚ぐ便利なる者なれり上下貴賤共に容易に犯す者多し蓋し其罪相犯結を云へり之を性惡と名け戒相を受し人も亦未だ授からざる者も均しく重惡となる者にして夫の西書にも妄語する者を鄙しめて無勇無力卑怯情弱の至れる者と誠しめたり況んや出世無上の佛教に浴する人の甚ぐ之を厭離せざる可からず譬へば阿片煙草の如し其之を喫するや一時口に甘く神と恍かし實に人をして快美に堪さらしむ然る共人の見て遠く之と棄捨するに只に其毒の人身を殘なひ性命を損するが故也而して人の妄語に於るや更之より甚ぐしき者あり阿片の如きは其害纒りに一身に止まり常に二七和合れ形体を殘なふのみより敢て法性の功德を損する迄には至らざる者なれ共忘語は其毒甚大にして現世に於ては人々の輕蔑汚辱を受け禽獸視せらるるに至り數く之を犯すや其罪相益く第八識上に薰染し終に設

評ニ曰ク氣骨俊健

以諸佛薩埵の攝取慈念も如何共したまふ事能はざるに至り本自法性の功德を滅却し法身の惠命をも斷絶せしめんとす嗚呼怒る可き妄語の因縁也嗚呼厭ふ可き妄語の業報也』此處起伏法

評ニ曰ク大妄語ノ解釋

妄語に二種の大別有と一を大妄語と云ひ一は小妄語と云ふ其大妄語と云ふ道義を偽る者にして彼天地の天神の造化せる者と云ひ又の皇國を二神の産成せし所と唱へ或の神魂を神の賦與せし者と云ひ及び凡夫にして我の解脱せり三昧を發悟せり實に阿羅漢を證せりなき云ひ道と謬まり法を殘なひ乃ち自他の安心を毀る是等の比類を名けて皆大妄語と爲す其小妄語といは世の常相の詐偽おして知れるを知らずと云ひ見ざるを見たりと云ひ或は耻可と事作を犯して我に非すと覆ひ或の意に善しと思ひて口を惡しと唱へ又の惡なりと知つゝ善なりと詐わる等は是れ等の妄語無量無邊にして其相千差万別也と雖も咸是れ名けて小妄語と成す』此所抑揚法頓挫法あり

評ニ曰ク小妄語ノ解釋

評ニ曰ク小妄語ノ解釋ヨリ更ニ大妄語ノ比擬ニ依ル語

んと欲し及他人の利益を己れに占せんとする等種々雑多の原因有りて現行する所に  
て其心術の鄙野殘酷なる實に惡むべく又其罪相も重しと雖も悉皆この形體の悲喜憂樂  
に就て己れを喜樂にして他の悲憂をば顧みざる悲心より起發する者成れば彼の法性の  
道義を殘ない身法の惠命を損し以て二世の安心を誤了するか如き大妄語に比すれば其  
罪稍輕しと謂ふ可し』此所關 鍵法

然るに目今世上の道俗多少の人々を大觀せざるに小妄語の卑陋して惡む可く且厭め可き  
事の從晝至夜に眼に觸れ耳に滿るすら尙や恬然として之を省みるに違ま無く或は浮雲  
の利名を求むるか爲め或は自己の活命の爲に自ら欺むき他を欺きて揚々たる色あるか  
如き者往々是あり況んや彼の大妄語の大罪たる愈く之を遠離す可し棄捨す可きを悟  
る者能く幾人かあらん音に之を悟る者あらざるのみならず却て邪説を稱讚して自教の  
害たるを知らざる者居多なるが如し嗚呼夫れ薄福の衆生にして是の如くなるは誠み哀  
憐の至り也然るに宿福深厚なる大人君子にして或は是の如き顛倒あるは抑も亦何の謂  
ひ成る歟噫』此所 取東

評ニ曰ク此  
處然ノ字一  
轉極テカア

評ニ曰ク針  
線ノ密縫合  
々ノ精敬服々

評ニ曰ク二  
輪空ニ當リ  
影ヲ揚ク

評ニ曰ク起  
首疊々同字  
ナ下シ叙シ  
去リ辨シ來  
リテ滯スル  
ヲ見ズ

(其六) ○想像の法話

人間萬事想像れみ智と云ひ能と云ひ道德仁義と云ひ學術技藝と云ひも皆唯想像に過ぎ  
る也想像とは思ひ遣りと譯し此物は斯る者成らん其事は然する者也等己れの了簡の及  
ぶ限り其物事の體相互作用等を思ひ遣る心の妄動妄斷を謂ふ然れば世間の諸法は假令眞  
實と認め究竟と爲し事物の本性本體を識了せりと思ひ遣る者も之を般若波羅密に臨む  
れば至竟一時の妄想たるを免がれざるなり』此處入手想像の二字を 以て起リ疊々同字を

般若の梵語爰に智慧と名く智恵に眞智妄智權智實智の差別あり而して尋常世間の智慧  
也と思ひ遣るものは學問技藝に通し思量分別を明らかにし他の痴愚昏鈍なる者に超過  
せるを謂ふ者也圓覺經に曰く智慧愚痴通して般若たりと蓋し此金言の意は愚痴を改め  
たるを以て未だ眞實の智慧と名く可らず無明業識の妄動に依て圓覺大智の内に智慧愚  
痴の二相を觀る即ち是れ妄想也此妄想の上に住着して愚痴を棄て智慧を求めんとする  
は尤も妄想の甚たしき者也況んや其妄想上又求め得たる智識を以て之と眞實智慧也と

評ニ曰ク舌  
頭五彩陸離

思ひ遣るに於てをや』此所抑揚法  
古人曰く道の知にも屬せず不知にも屬せず知は是れ妄覺にして不知は是れ無記也と然るに學佛の徒往々知解を以て道を得たりと思ひ遣り或は空寂を喜びて菩提と思ひ遣る者多し誤れるの甚た敷なり道若し智解と以て得くんは何ぞ知に屬せすと言はん菩提若し空寂を以て得くんは何ぞ不知に屬せると言はん乎』此處尋策法

評ニ曰ク此  
處此處ノ眼

夫れ無常れ理を知り因果の旨を了し世間の名利を捨て出世の寂靜を樂しむは固より尙とぬ可き事業にして之を世上痴愚の人に臨むれば智慧の人と稱す可しと雖も此分劑に安着して知解或は空寂を以て菩提道となすに至らば佛法も亦た妄想中の一分に過ぎざる思ひ遣りと爲り了らん如何して眞智を覺了して萬法と胸襟に歸し乃至佛果菩提を成する事を得んや三賢十聖の菩薩或は如幻智を證し或は無生智を得るも亦た未だ佛果を成する事を得ず等覺の地位に至りて漸く前の三賢十聖の諸智共ふ忘するを金剛喻定と名け此時大智始えて現前とる事を得ると佛果と稱し菩提を證すと名る也豈凡夫情識の妄動たる想像を以て其邊際をも測り知る可き所ならんや』此處伏中ノ起

評ニ曰ク此  
所覺ヲ起シ  
兩ヲ呼ブ

然りと雖も情識妄動の凡夫を棄て別に大智發覺の聖者を求む可きに非ず蓋し大智とは即ち人々各自本來具足の大智のみ然れば最上利根の機は三賢十聖等の階級をも履ます直下に本有の大智に契當す之を一超直入如來地と云ひ初發心時便成正覺と云ふ謂ゆる知に屬せず不知にも屬せざる圓通自由の道體爰に於て乎初めて顯現する事を得るなり』此處起中ノ伏

評ニ曰ク狂  
電閃閃  
閃閃

然れども中根下機の衆生に至りては直下に此の最上乘に投入する事能はざるのみならず想像の智甚だ盛んにして業識の妄動須臾も止む事なく愈々想像すれば愈々道に遠ざかり或は知解に着し或は空寂を安んじて佛祖の境界を思ひ遣るのまなれば爰も於て六度万行の設け五十二位の差定無き事を得ず蓋し皆中根下機を誘導して彼岸に到着せしむるの船筏成る耳已船筏は彼岸に到れば既ふ無用に屬すと雖も其初は船筏を得て之に乗るに當り船中の規則航海の線路を審らかにせざる可らず颶風の備へ破摧の慮なかる可らず然り而して既に彼岸に到り得るや上來諸くの方法皆無用に屬するが故に亦た決して之に愛着す可らず若し之に愛着して船筏を棄て去ること能はずんば是れ未



二年チ加フ  
嗚呼人ノ香  
ハ其ノ罪  
ニ非ラズ始  
メ自カラ人  
チ欺ムクニ  
歸因スルニ  
ミ

親ノ慈悲モ  
水泡ニ販ス

能く知ッて居ますのぐに、助四郎「ハテナお倉、まさかおまへの心の丸ちゃんがお前の歳を三十で御座いますとすッパリ云へばよかつた」と云ふのしや有るまい

○品物を賣て後ち代金を請求する 女房がイヤとかぶりの其場合に「ハイと素直に返事したらば決して油断す可らぬ是れぞ亭主に反物新調の内談を目論見最中の印しと心得可し

○悪少年の遁辭 或るわんをく小僧が水泳きに往きたいと云ふと親は氣遣ひ「水泳ぎは毒よ成るから廢すがよかるうお前は今朝こそお腹が痛い」と云ふて居たトやないか「そりやそうてすが親父さん私はお腹を上にして背中で泳くことが出来ずすは

○勤勉家の祈禱の詞 或る勤勉家が祈つて曰く何時でも一寸半時間位無駄に遊ぶ暇の或る人の近寄らざるやう吾を護り玉へ斯る人は必き何所へか這入り込み用ゐる人の半時間を一寸消費するに間違なければなり

○訴訟依頼者と代言人 訴訟依頼人「夫れでは貴君の此訴訟を私の負けと御鑑定で御座いますその代言人「イエ、決して貴君が敗訴成さる氣遣ひは御座いませぬ何れ貴君

の御孫の代當りで彌々敗訴と極まる位な事で御座いませう

○伯母と甥 伯母「夫とトやお前はお金の入るときばかり私を尋ねて來るのぐ子甥無毒な顔付にて「夫れだッて伯母さん如何に何でもそんなに度々の参らさせぬ者を

田舎者ノ妙  
計都合人ヲ  
シテ一驚ヲ  
喫セシム

貧窮者生ノ  
情態

○田舎人 或人田舎より出京したる朋友に途中おて出逢ひ「ヤア此頃のどうなさッて居らッやるの先度の御書面で馬の事お付角頼藏氏と訴訟中だと承はりましたが如何落着きましたか」田舎人「私の大勝利頼藏先に」と泡吹かせて遣りました、御承知でも御座いませぬ判事が古今無類の正直者で御座いますから手紙に添へて少々斗り金を贈りまいた」或人「そんな事を爲されたら不埒な奴とて大目玉を頂戴し却てあなたの負公事に成りそなただと思ひれます」田舎人「其事で御座いますヨ若し其手紙に「判事正直正兵衛様角頼藏」と書く事を忘れて遂うッかり私の名前を書いて置きましたなら必ずお考への通りになッたで御座いましたろう、エ、どうで御座います細て首を締めないでも犬を殺す法の幾らも御座いませうがナ

○華族と僕 男爵華族「なんだと又新らしい法被が入ると餘まりひどい、貴様は三月



賢才聞クテ  
思ムト思ヘ  
ハ必ラズ慢  
官ハ爲スベ  
カラズ

人トシテ此  
三問ヲ能ク  
スレハ立身  
出世期シキ  
映ツベキナ

世ノ未流ニ  
當ツテ人情  
ノ浮薄ニシ  
テ且ツ狡猾  
ナル想ヒ看  
ルヘシ

此堂音ノ金

夫れなら私も其時氣が付いたの  
○馭者と役員 一人の男馬車會社に到り何卒召使ひ玉はれとの依頼に役員「お前の御者の術を知つて居るか」男「能く存して居ります」役員「お客に誰れても皆丁寧に取り扱は成らぬが夫れでも承知か」男「勿論で御座います」役員「又其上に正直でなくては成らぬぞ例へて申せば前前の馬車うらお客が下りた其跡に紙幣一萬圓這入つて居る懐中物が落してあつた時お前は前々どうする積りか」男「其時どうもしませす唯寝て居て利足丈けて暮らしと立てます」

○祖父と孫の話 祖父「坊や前のお父さんやお母さんがお前の欲しい物と下さらぬと云ふど何時でも大きな聲を出して泣くのが癖だが誠に宜敷ない手ね祖父さんをお覽な色々欲しい物が有つて貰ひぬ時があるけれ共お祖父さんは一度もお前の様に泣いた事はないヨ」孫「ね祖父さんちよいと一遍泣いてお覽な夫れこそ岐度とんか物でもね祖父さんの欲しい物が貰はれるヨ」

○學者の名言 或る學者先生の著したる童子訓に曰く斯クセヨ又斯クセザレト親達ノ言付ケタルトニ其何故ニ斯クスベク又斯クスベカラザルヤチ問返サトルガ子カル者ノ道ナリ云々と成る程是は名言なり蓋し親達が子供に指圖の其度毎に一々道理を問糺されて是に返答せ給は成らぬと有りて聊か心配當惑す可き意味合もある可れば也

○英國人形賣 英國にて國會議員改選の際或人形賣りか籠一杯人形を入れて群集の中を往來し「保守人形々々々々無類上等の保守人形をね召しなさい」と呼び歩き居たり數日後に此同じ人形賣が群集中或る自由黨候補者の前に來り「自由人形無類上等の自由人形目出度い自由人形をお召しなさい」といふを聞きて此自由黨員少しムツトして「何だ此盗人めが一昨日こそ手前の人形を保守人形と云ふて賣つて居たドやないか」人形賣「旦那の仰せの通りで御座います一昨日迄は此人形が皆な盲目で御座いましたか唯今では此通りにみんな目が明きました」

○振部氏の妙な問題 昨夜振部金助氏が胸に一個の大問題を藏めて急死集會所に入來り並居る少年に向て「若し僕が逆立をして頭を疊に付けて居れば忽ち頭に血が溜るぞろろ」と何の謠を言掛ける様子お並居る少年の皆其通りと答へて一人も異説を唱へる

言ナル所以  
ヲ知ラント  
欲セバ先ツ  
テ妻ヲ可シ  
テ今日ハ是  
ナルヲ覺ル

第一問衆人  
ヲ驚カシメ  
第二問衆人  
ヲ笑ハサシ  
メ而シテ自  
カヲ知ラズ  
若

シ振部氏ヲ  
シテ今一言  
ヲ發シシメ  
衆人ヲシテ  
將タ如何ナ  
ル感情ヲ起  
サシムルヤ  
未タ知ル可  
カラサルナ  
リ

敷井君ノ答  
辭案外ニシ  
テ人ノ意表  
ニ出ツ

教師休操ノ  
効ヲ解ク一  
言ハ實一語  
ハ虚生徒其

之ヲ取リテ  
師ニ如シテ  
ナシテ如シ  
教師ニ就テ  
休操ヲ學ベ  
バ却ツテ身  
体ノ不健康  
トナルモ知  
ルベカラズ  
人ヲ使ハハ  
却ツテ使ハ  
ルノテ空言  
ニ於テズ

成人ノ經驗  
ニ由リテ見  
レハ眉及ビ  
瞳毛ハ頭髪  
ト同シク幼  
時ヨリ之レ  
アリ然ルニ  
髪ヨリ鏡

者なし振部氏得意然として更らに言葉を續き「そんならば今僕が此の通り足を疊に付  
け立てて居るのに何故此足に血が溜らぬだろう」「少年傍らより「そりや能く分つて居  
るサ頭と違ひ君の足の空虛で無いから」此返答に一同手を叩いてドット笑いたりガ  
振部氏一人の此口上ヶ何で左程に面白いやら分らざりしとぞ

○老人が甥を戒める詞 或る老人が若い甥を戒めて「何處で遊んでも歸る前には必ず  
拂ひを濟まして來る者ヅテ」甥夫れても伯父さん拂はず金の持合せがない時はどうし  
ませうか」老人「其時は歸ッちや成らぬ

○醫者と書生 書生「オイ、敷井君大造にお急ぎだな」若い醫者「今病家から召びに來  
て驅付けてる處ぞ」書生「ア、さうかエそれぢやそんなに急なすとも善いハ僕と一所に  
一寸向ぬの麥酒屋へ寄て一杯遣り玉へ」醫者「イヤ、とんでもないそんな事をして居  
る間、病人が快く成つて仕舞ぬハサ

○教師と生徒 休操の教師生徒よ向て休操の利益を説くとて「凡そ世の中に休操程身  
体の健康によい者ハ有るまい是をすると体力が増して壽命が延びて……」と云ふ時

生徒の一人横合から口を出し先生近來こそ休操など、色々な事が始まりましたか今か  
ら百年も前の人に休操を致した者の一人も御座ひません夫れでも……」教師得  
意な顔色にてさうで御座る我々の祖先に休操を勉強した者として一人も御座ひません  
夫れだからと覽しる皆死にました一人も今生きて居る者の御座ひません

○奥様と下女 奥様「アノれ隣の女中お宅に歸ッたらば今度の日曜には何にも致しま  
せぬが夕飯を差上度う御座るますから旦那と奥様と御一所に此方にね出下さいましと  
左様申上げてお呉れナ」下女「旦那はお出に成りませすが奥様はね宅をお外づし成さる  
事の出來ますまいよ」奥様「さうかエ小さいお嬢さんでもお鹽梅が悪いのさ」下女「イ  
、エ御病人の御座ひませんけれども今度の日曜はわたしの宿下りを致す筈の日です  
から

○頭髮と髻と年齢に相違ある話 人間の頭の髪は何故顔の髻よりも早く白毛になるに  
やと最と不審を抱く人あれども髪と髻と其年齢に二十歳の相違あるを思へ何も不  
審なる譯なし、



レテ自ニ化  
スルヲ見レ  
ハ此理合ハ  
スト云フ

物皆應分チ  
考ヘテ之チ  
爲サハ徒勞  
鮮ナクシテ  
實益多シテ  
ノ大業ヲ望  
ム者宜シク  
是等ノ言チ  
玩味シテ方  
向ヲ定ムヘ  
シ

大將ノ用意  
寔ニ常ニ新  
ノ如クナル  
ヘシ

寶言葉ニ買  
言葉

○老女と植木屋 心配性の老女「植木屋々々アラクあれをこ覽な何處の小さい子がれ前の鎌を遊道具にして居るヨ」植木屋「有難う御座います御隠居様ナニ構ひませんヨあんな小さい子てい逆も鎌に疵は付け得ませんヨ

○朋友の婚姻 至極男振りのよろしからざる人或る友人に向ひて甲君のせうして細君を貰ひ出したるチ乙「斯ういふ譯サ最初己れの欲しいと思ふ娘をせうかなして貰つて遣らふと色々工風したがドイツもコイツも分らぬ奴て急よ婿が明か糸エハサ、ソユエといのつまりに己れを欲しがつて居る娘の方に方向を轉して相談を始れた處が案するよと産むか易いで即坐に婿か明いたのサ

○遠慮 足下若し途上にて知人に邂逅し最も懇切に待遇せられて我兩手を握りめめられたる時ハ(我錢入れのツボンの隠しは後の方に口の開け居る事を思ひ出して)連れの悪漢が後に廻り居りいせぬかと先づ後邊を顧みるう尋常の手順なり

○酒屋の主人と客 酒屋の主人或る常得意の客に向ひ貴客も酒さへ召あからせに居た成らば今頃ハ大造な御身代て二疋引の馬車に乗つてお通り成さる御身分であらうに

香助「そしてお前も酒さへ賣らせに居たならば今頃ハ己の馬車の上で御者をして居たらうに

○若夫婦 若い亭主、籠甲の櫛笄にするウエ珊瑚樹の根掛けにするウエ又は金無垢の中差しにするウエ、とれてもお前の好きなのをお擇りナ 若い女屋「良人、成る丈け無駄なれ金を遣はない様にせ無りやいけませんヨアノ私ハ斯う思ひますはそんな物を一ツづつ買はないて三ツ一度に取るか善う御座いますヨさうすると屹度小間物屋か幾許か代をまけますハチ、ソラ私の言ふ方か餘程儉約てしよ

○書生と醫者 書生「先生貴下は餘程お顔色が悪い」醫者「ハイ過日來少々不加減て」書生「誰れにれ見せ成さつたの」醫者「イヤ自分で療治して居ります」書生「ハチそれでは自殺事件て御座るナ

○佛國の外交家と詩人 或る詩人か佛國近世外交家の泰斗マレランド氏と共に市中を散歩する折自作の詩を得意に吟誦して行く手の方に一人の男か欠伸して居るをマレランド氏が目早く見付て連れの詩人の袖を引き「コレそんなに大な聲を出し玉ふなアレ

余ハ亦種々  
買フ可キ品  
名チ口ニ稱  
ヘテ竟ニ買  
フ事ヲ中止  
スルガ大ナ  
ル節儉ナラ  
ント想フ

余傍ラニ在  
アラハ更ニ  
一問ヲ發シ  
必ス云ハシ  
若シテ容  
ハ誰レニ容  
体ヲ書カ  
スカト  
外人ノ大膽  
無神經  
人ノ謹

我國ニ於テ  
甚タ稀レナ  
ル話

見玉へ向ふの男か聞て居るヨ

○双子 學校教師新入の生徒甲に向ひ「お前さんの御名前と年齢」生徒甲「蓮賀阿武太郎十七歳」教師次に生徒乙に向ひ「お前さんの」生徒乙「蓮賀甲子次郎十七歳」教師「御兄弟てすか」生徒乙「左様で御座います」教師「ア、ア、双子て入らッしやるか」生徒乙小首を傾け乍ら「先づ左様で御座います親父の方から申すと双子て御座います私共の鹽湖（一）夫數婦を公認したる米國の一地方から参りました」教師「ア、成る程」

自カラ能ク  
其善悪ヲ知  
ルト雖モレガ  
リト下レガ  
評テ下レガ  
目ヲ失スル  
コトアリテ  
シマサルベ  
クニヤ

○書師と縦覽人 繪畫共進會にて或る縦覽人一個の畫の前に立留まり「こりやなんど是でも畫で御座るといふのか驚たナア幸に無落款だが若し名前を書入れると云われたら八歳童何々寫してもやらのすのぶらうと先生御鑑定如何」と云れて隣りに居る人「甚た失禮で御座い升か其畫は私の書きましたので御座います 縦覽人「イヤ是はとんた失禮を申上げました眞平御免下されまし内實私はお耻かし乍ら書などの事はとんた得ませぬほんの素人て御座いますから必きお氣に掛けられ升な唯私の皆人の批評して居るのを聞て一寸其口眞似を致した計りて御座います」

立君獨裁豈  
ニ立君獨裁  
メノ誤解ナラ  
ズヤ

○父子 喜子「お父さん立君獨裁といふ何の事ですか」父「こりや六ヶ敷いヨお前の分かる様に講釋をする事の逆も己に出来ないう夫で子ね前が大きくなッて持參金のね嫁を貰ふ迄少し待つて居てヨ其時になると立君獨裁の意味の獨り手に分かるから

若シ此哲學  
者ニ種ラ子  
効用ヲ實問  
セハ必ラズ  
云ハハ種ラ  
ハ火中ニ投  
シ破裂セシ  
メテ人ヲ驚  
カスト効ア  
リト

○哲學者の妙言 或る哲學の大家が曰く凡そ宇宙間の經濟に於ては一物として無に歸するものなし例へは蜜柑の如し是を割いて中の實だけを食ふて口を濕はし其皮の窓から投出したまゝ何の用とも爲さざりうといふに決して左よあらま下を通る餘所の男に其上を踏ませて這つて轉んで向ふ脛を打折するといふ一廉の役目を爲す物也

○紳士と美人 或る紳士が情婦に向ひ「私は斷言してね前を美人と申しますヨ」婦人「アノなんてす子お前さんの心で左様思はなめても口で左様お言ひてしよう」紳士「而して私ウ口で左様言ひないてもお前さんの心で左様お思ひてしよう」

○婦人と小兒 正味は何歳であるか一時年齢の知れにくひ若作りの或る婦人の膝に坐はりて居て不思議さうよ其顔を詠めながら子供「伯母さんの何歳たエ」紳士「さうさ子供何歳に見ゆるかエ、見える丈けの歳たエ」子供「さう、そんなに年寄をかチ」

婦人案外ノ  
首ヲ聞キ定  
メテ落膽ス  
ベシ

饒舌ノ人ハ  
失聲局ヲ結

實ニ妙娘

善太郎ノ一  
善所ノ聞キテ  
其所爲ノ善  
太郎ナルヲ  
知ルニ足ル

通帯人ヲシ  
テ此間ニ答  
ヘシメハ必  
ズ云ハシム

○母と小娘 母(小)な娘に向ひ「ね淺モウね前か黙り、そんなに饒舌り付られて堪らないヨ、何と云へば口返答斗りして何時でもね前ウツ先きに云ひ止めた例うないヨ」  
娘「そりや私の不調法トや御座いませんヨ、モウ是を切てね母さんの方云ひ止めるのたと云ふ事う一々私にの分りません物を」

○慾張り爺の祝詞 或る所の溜ら爺え、分ら爺え、下らねえ、いけ好爺ね、六ても爺え、人情知らせの慾張り爺めが消防本署の開業式の祝詞に左の如く述べたり、此場内の蒸氣ボンブは世上幾多の老處女の如く常お其支度整ひ居て終に其需用のなさを希望すト  
○伯母と子供の話 伯母さんの差圖お從ひ子供皆々夕飯の膳に向ひたるとき伯母「オヤ誰れたら此れ孝の養たのといぢりましたチ、誰れたエ」満坐寂として一人の間お應ぢる者なし善坊お前トやないかエ善太郎ね父さんがお飯とたべる時にお話をする者トやないと云ひましたヨ」

○夫婦差向ひの話 火燈し頃夫婦差向ひの時、女房「家の暮一の爲め毎月六十圓宛渡して下さるとして其中からとうなり私か儉約して毎月十二圓宛渡すとしてならばあなた

月其金チ  
貯蓄シテ多  
ク額ヲ増ス  
ニ至リテハ  
吾又之ヲ出  
シテ使用ス  
ベシト

地獄ニ赴ク  
ノ船ニ於テ  
テモ未ダ此  
ノ如キ例チ  
聞カサルナ

はマアとぞして下さるてしよう、亭主瓦斯ランボお火を移し乍佛頂面にて「どうして呉れるかどエ、夫れは何んの事ヲ吾れは固より一箇月四十八圓どこぞ云ふたてはかいカ」  
○漁船の緩急 須美洲瓦斯藏氏か此程米國より歸朝したる或る華族の奥方に向ひ「サソフラランシスコ」より横濱まで太平洋の航海には幾日お掛りて御座いまいたの」奥方「十八日掛りました」須美洲氏「夫れは大造お早い先頃私の弟が米國へ参りました節は丁度二十日掛りました」奥方「お前さんの弟御の大方下等室にね乗りなされたのてしやう私共は上等室に乗りましたから別段に早う御座いました」

○中悪しき亭主と女房 亭主不興の体にて屹度女房を睨み「十一月十五日の如何なる悪日ぞ五年以前お前と二人て三々九度をした彼の十五日か怨ましい」と云はれて女房の落付顔「マア勿体ない事仰しやいますヨ長い月日の間お互ひに嬉しいと思ふたはたつた彼の十五日ばかり大事の日トや御座いませんわ」  
○ヤリクリ商人 甲「世の中お錢と借るよりか未だ外につらい苦しい情けない事が外よ有るう」乙「有る共其借財を濟す事ヨ」

丸ニ自分  
ノ年齢ヲ語  
ラスノ老婆  
ノ妙計絶妙

探訪者ノ聞  
クハ實

紳士ノ謝絶  
スルハ虚  
内々ノ二字  
後ノ証左ト  
ナル

母言ヲ望ミ  
証左ヲ固ク  
ス  
醫テ記載セ  
サルノ一言

○新造と下女 御新造(來て一月ばかりよなる下女に向ひ)お慶お前は今朝未だ座敷の掃除をしないのぢやないかエだば御覽ナ向ふの隅に蛛の巢が残つて居るぢやないか下女「私存しませぬヨそりや大方先の婢が残して置いた蛛の巢てしよ」  
○亭主と老婆 亭主が或時我女房の事を老母に噲して「内のお丸は兎角物事に尾鱸を附け何か仰山に申してなりませぬぞうかわの癖を直させたいものです」流石の老母なり即答して「お丸に自分の年齢の話しをさせて御覽一度て直りませしよ」

○探訪者と紳士 或る新聞の探訪者が有名なる某紳士に面會して云ふやう共同相場會所の事に關し御意見を伺ひ度存じます」紳士是を聞て眉を蹙め暫し考へて答ふる様「夫れは御斷り申します私には新聞記者へ向て彼是と説を述へ夫を新聞に記載して貰ふ事は甚だ迷惑に存じます併し新聞に記載するてな一に唯内々私の意見を貴君迄申上る事成れば差支の御座いせん」  
「承知致しました」併し念の爲に私の申上る事又其大意をも紙上に御記載成さるぬと云ふ御誓言が望ましく存じます」  
「誓て記載の致しません」斯て紳士は十分に意見を吐露し了りたれば探訪者の重縁て又決して新聞に記載

探訪者ノ實  
ヲ固フス  
紳士翌朝新  
聞紙ヲ待チ  
兼ルハ則チ  
自カラ虚ナ  
ルノ第一証

虚ヨリシテ  
見レハ實ハ  
惡ノ如シ

紳士自カラ  
誓言ヲ破ル  
結局ノ一言  
自カラ虚ナ  
見シ探訪者  
ノ實ヲ照ル

亭主女房ノ  
言ニヨリテ  
已レノ愚ナ  
ルヲ發明シ  
竟ニ女房ヲ  
買ヒカブリ  
シ事迄ヲ悟  
得シタリ

せざる可しと約束して相別れたり翌朝紳士の新聞の配達を待ち兼縁取る手遅しと其新聞紙を開きて○共同相場會所に關する某氏の意見 と題する見出しを標せども一向に見えぬ細君傍より「何を探がして居らつしやるの」紳士新聞紙を坐し打ち付け「ナニ何でもないよと云ふも新聞の探訪者と云ふ奴の少しも信用が掛けない」細君「何ぞあなた御話成さつた事でも新聞に書きましたか」紳士「イ、エ何んにも書かない」細君「夫れぢやよいでは御座いせんか」紳士「イ、エ甚だよくないマア物をよく積もつて御覽な入に二時間も長々と話をさせて置き乍らこんな失禮なわしらひをして夫れて濟むかへ全体新聞には探訪者か己れに遇つて説を伺ひ度と云ふけれども己れか承知しなかつたと書いて置いて外の所に己れの言ふて聞かせた通りの事を委しく書くの本統たツイ新聞の探訪者程鼻撮みな者の有るものぢやない」

○女房天下 亭主買物より歸り來り女房より頼まれたる買物を渡すを見るよ如何にも買ひ冠りたる物なれば女房は大にせき込み「私は生れてからお前さんの様な男を見た事かないヨ是迄私の知つてゐる事て何事でもお前さんの証されなかつた例しかないよ」

冒頭ノ言甚  
テ讀者チシ  
テ起サシム  
咳ノ一字チ  
聞テ讀者安  
心ス

是ニ於テ始  
メテ本題ニ  
入ル

亭主ノ返答  
甚ダ穩カナ

亭主「誑されない例しかないえ」女房力を入れて「ハア何んても」亭主「お前の言ふのう處  
言てないやうた、こいつ買ひ冠つたなと婚禮の晚以來始終己れは疑はて居るんた」と言  
ひつゝ二階の障子を開けスワと云ふとき何間飛ば糸バ成らぬの逃げ路を測量したり  
○酒類童子 或る禁酒會員か酒類童子の末孫に向ひ「君はなせこんな穢らはしい物を  
お飲なさるか」上戸「齒で噛む程に固まつて居ませぬから止むと得ず飲みます  
○女房の馬鹿らしい心配 若い女房「アノ今アノ何のお前さんよ遇ひたひとて坐敷に通  
はて居ますよ」亭主「さう誰れたえ」女房「アノ斯う申してのお前さんのお氣に障るう  
は知りませんう此間お前さんの咳かどうも私の氣に掛つて成りません夫にお前さ  
んの平氣で居て少しも養生を被成らなから私はどうも心配で成らないですよ若し今  
お前さんが無くなすつたう私いとうしましよ」と云ひつゝホロリと涙を滴せば亭主  
は慰め「お前か餘り私を大事よ思ふて呉るうらソソな下らない事に迄心配して悲し  
く成るのた私の眞個に達者だからソソなに氣遣ひてないよ併し念れ爲めお前に心配さ  
せぬ様に一寸お醫者に見て貰ひましよう、ナニカエ今坐敷に入らつしやははてるのは仙

女房ノ答辭  
案外ニ出ツ  
物ヲ安價ニ  
售ルハ恰モ  
水ノ低キニ  
就クガ如シ  
ト聞ク然ル  
ニ元價チ切  
リテ賣ルハ  
則チ恰モ低  
地ニ非テ穿  
ツガ如シ百  
川是ニ傾ク  
ハ自然ノ理

是等ノ問チ  
ハ普通多ク  
アルナラ  
モ是等ノ答  
辭チ爲スモ  
ナシハ甚ダ  
少

老人ノ第一  
誘賭博少年  
ノ第一答辭

庵さんがね」女房「イ、エお醫者様ちや有ませんよあれハアノ生命保険社の手代です」  
○廣告の妙案 或る商人の說に新聞紙よりも一層便利なる廣告法ありと云へりその如  
何と聞くに此人我女房に向ひ「是は極々の秘密成れともお前斗りに明かそが實ハ今我  
店にてハ元價をくゞつて品物を賣捌き居る也」と云ふと翌日に至り此事を言ひ傳へ聞  
き傳へて評判を爲す婦人は凡そ千人も有りとも  
○リーピングストーン郡に獨身男子多し ニウヨーク州リーピングストーン郡の或る婦人  
は男女二十七人の小供と儲けたる由斯る明白恐怖す可き統計のあるに拘はらせニウヨ  
ーク州人の中に何故近來世に獨身男子の多きやを疑ふ者あるハ最と訝かし  
○太郎 太郎「お母さん今私は五歳で次郎ちゃん三歳で子何時迄立つても次郎ちゃん  
の方が年齢か下かエ」母「さうたよ何故ウエ」太郎「好い事子夫れど何時迄ても次郎  
ちゃんを酷めてやる事か出来るヨ」  
○老人と少年の問答 或る飛脚船の中にて年老の上等客三名小なる卓子を取巻き骨牌  
を始めんとして一人相手の不足すれば何人か呼入れんと見廻はす折柄彼方より一美小

老人ノ第二  
誘飲酒少年  
ノ第二答謝  
老人ノ第三  
誘喫烟少年  
ノ第三答謝  
老人ノ第四  
誘色情少年  
ノ第四答謝  
老人ノ四誘  
皆少年ノ禁  
物也而ノ少  
年ノ如キ少  
此ノ如キ少  
年ナルヲ以  
テ老人ノ主  
意タル必ラ  
ズ第四誘ニ  
在ルベシ

無事ニ因テ  
筆ヲ起シテ  
專ニ因テ筆  
ヲ閣ス

年の來るを見て老人の一人進み寄り「若し誠な卒爾な事を申上升が實に今骨牌をして遊ばうと申して人が足りずに困て居ります貴君何卒お這入り下さりませぬ」少年「有り難う御座い升が私の骨牌を致しませぬ」老人「夫ちや酒を一つお上りなさいまし」少年「有り難う御座い升が私の酒を用ひませぬ」老人「夫れぢや此煙草を一つお取りなさいまし」少年「有と難う御座い升が私は煙草を吹ひませぬ」老人「イヤ是はく好いお心掛だ若い者は左様なくて成りませぬ、マア此方の部屋に於てなさいまし妻や娘も居りますから引合せ致しませう」少年「有り難う御座い升が私は女房は貰ひませぬ」  
○亭主の出立を見送る女房 遠方に旅立する亭主を見送りて今手と分つ時に臨み女房「左様なら折角お厭ひ成されまし而して私の事を忘れて思ひ出さぬぢやいけませんヨ」亭主「飛ても無い事を云ふお前を忘れて溜るものかエ」と云ひつゝ萬一の用心よとて太き紙小捻を拵へて羽織の紐に結び付けたり  
○女用文章の一文例 左に記するもの、或る婦人が良人の旅行先きに出したる文の文言なるか女用文章中の一文例と爲すに屈強の物ならん

吾輩ヲシテ  
善助ヲ爲サ  
シメバ必ズ  
日ハシメバ  
鶏頭トナル  
ヲ得ズト

平々凡々ノ  
子女ヲ學ケ  
ンヨリ得ル  
ノ如ク小兒  
ノ一言天下  
ノ針砭

一筆しめしり何も爲す事なき儘此文認め申候何も申上る事は無き儘爰に筆止め申候めてたくのしく

○犬と下僕 奥様善助や犬を外へ連れて往ての一廻ぐるりと廻つて運動さして御出儀 奥様へ申上げますか彼の犬のどうしても私の後に喰附いて参りません」奥様「夫しや善助お前か犬の後に喰附いて御出ナ」

○職業 うるさい差出がましい老耄親爺か 年季奉公人の團居して居る中に入り来り「若い衆く若い者の何んでも精出して下の方から働いて段々上に経上る様に心掛糸バ成ら糸えせ」若者の一人「そりや私には出来やせん」老人「なせく」若者「私は井戸掘てすから」

○小兒の希望 或る母親か三歳に成る元氣の好い噉舌の童子に向ひ今度赤坊か出来れば男か好いか女か好いかと尋ねたるに左の思ひ掛けなき返答に逢ふて肝と潰したりと云ふ「お母さん、若し母さんの都合がどつちても好いのなら子坊の犬子の方が好いヨ」

○女教師と女生徒 或る高等女學校にて女教師か生徒に申聞け文章の妙を悟るには是

女教師生徒  
ヲシテ善ニ  
導カントシ  
テ返ツテ惡  
ニ陥シイル  
ノ傾キアリ

或ル一書ハ  
暗ニ金瓶梅  
ヲ指ス

非馬琴の著書を読まれば成らぬと色々勸むれ共一向に聞入るゝ様子無し或る日其教師か生徒一同に向ひ又例の馬琴論を始めたる時此中に馬琴の本を読みたる事の有る人丈は手をお舉げなされと云ひたるに是に應じたるは唯一人成りしり其娘の曰く私は金瓶梅を除けた外馬琴の本は皆読みましたか金瓶梅は父上か若い女の讀む物てい無いと申してとうしても讀ませんと此話の有りたる後未だ一週間も立たざるに生徒中一人として馬琴の著書就中其或る一書は通讀せざる者なきに至りたりと云ふ

○婦人の赤面　お丸さん御機嫌宜敷う、私は先刻から半時斗りも貴女を見附け様と存して彼方此方探しましたの一向分かりませなかつたのさ然うする内に此か召物か一寸向ふの方に見えますと昔しから能く覺ゆて居る稿です物ぐからソラ彼所にお丸さんか居なると直きに知れたのですに「など云ぬ挨拶は其婦人の胸に釘を打つに均しき物也

新編 説教學 畢

### 出雲寺商店出版發賣書目

天台坐主大僧正大杉覺賢師題字  
米國オルコト氏序文  
眞宗司教赤松連城師譯

中江兆民居士序文  
眞宗學朝倉了昌師著

### ● 佛教開眼論

西洋假綴全一冊  
正價卅錢郵稅拾錢

著者朝倉師が學問ノ博ニシテ深ナルト、經驗ノ確シテ實ナルト、德聖ノ尙ニシテ遠ナルト、精神ノ雄ニシテ活ナルト、事業家ナルト、卓説家ナルト、今更喋々ヲ要セズ今般自ラ奮テ海外ニ渡航シ我佛敎ノ西漸ヲ企圖セラレシ際某氏等ノ需ニ應シテ此書ヲ著シ給フ其大畧ヲ云へハ敢テ其部宗ニ尙黒セズ外カ、理哲、諸學、天耶、諸敎、及ヒ、政治場裏、ニ論入シ内ハ現今日本佛敎ノ全面即チ大小乘聖淨門ヲ開顯シ章ヲ分チ段ヲ逐テ叮嚀ニ簡約ニ示サル世既ニ二宗綱要ノ如キハ稍々浩漭欠畧ノ失ナシ雖然恐ク未タ遇高尙ノ嘆ヲ免レ難シ其他諸氏ノ著作多シト云ヘトモ孰レカ此ト兄弟スルヲ得ン今此書ハ其實眞理ヲ發見シテ高遠ノ法性ヲ日用卑近ニ快ク説去ラレタリ朝倉師ノ、卓論、實業、思想、德行、識見、文學、ニ非ンハ何ソ能ク是ノ如ナクルヲ得ンヤ蓋シ一般人民ノ活眼ヲ佛敎ニ開カシメントシ給フ素意此一篇ト現出シタルモノナレバ一讀ヲ得ン者ハ其益果シテ大ナルベシ

町元春空編輯

### ●冠註西谷名目校本

本全二冊 定價六拾五錢  
稅郵拾 錢

米國 オルゴット氏演說  
錫崙マンマバーラ氏演說

京都尋常中學校教諭  
山口縣元記音學會長

藤井裕爾氏通譯  
大久保一支速記

### ●護法大演說

洋風假綴美製全一冊  
定價拾貳錢 郵稅六錢

(マンマバーラ)ハ護法ト譯ス

本書ハ過四月二十七日ハ氏トだ氏ト袂別ノ爲メ洛東知恩院ニ於テ佛教談話會ヲ開キ二氏ガ眞理ヲ愛シ邪教ヲ惡ムノ余リ滿腔ノ熱情ヲ吐キ錫崙古今ノ事情ヨリ說來リ日本人ハ是非共國ノ爲ニ佛教ヲ信ゼザル可ラズ等ノ痛論ヲ熟練ナル速記者ガ片言隻語モ漏サズ速記セラレシ者ナレバ實ニ其辨論ノ寫眞トモ云フベキモノナリ一度此書ヲ讀ムトキハ親ク傍聽シタルト同感ヲ喚起スベキ者ナレバ苟モ日本人タル者ハ宗教ノ異同ヲ論ゼズ必讀スベキ良書ナレバ速ニ一本ヲ購讀有リテ其言ノ虛ナラザルヲ知玉ヘ穴賢ク

玉林祖音編輯

### ●釋門一字千金集

小全一冊 定價四拾五錢  
郵稅三拾六錢

渡邊耕堂編輯

### ●說教三百題

中全三冊 定價三拾錢  
郵稅拾八錢

此書ハ因果應報道理、故事因緣漸等ヲ種々集メタル書ニシテ實ニ說教ノ種本トモナルベキ良書ナリ

義水智泉編輯

### ●頭書 天台四教儀

大全一冊 定價四拾五錢  
郵稅拾四錢

右ハ義水智泉上人花園教校に於テ講授する次テ頭書に故慧澄和尙の山簞を掲載し且つ句間ニ鮮明なる新註を挿入し初學をして一目瞭然に文義を通曉するの良書なれり四方就學士の陸續購求の營を賜はん事を希望すと云ふ

義水知泉編輯

### ●冠註 菩薩戒經義疏校本

大全二冊 定價金五拾五錢  
郵稅貳拾錢

此書ハ天台智者大師撰述ニシテ詩家ノ繁釋ヲ去リ畧要ヲ撮ミ佛祖一般ノ威儀ヲ制シ玉フ急務ノ戒疏ナリ今回該書ニ層冠ハ無論傍註ヲ加ヘ木版註明ニシテ一層懇切ニ製本シ弊店ノ利養ヲ不顧只管各宗諸彦ノ購讀講義ヲ祈ルノミ



臨濟宗妙心派管長關無學禪師題字  
曹洞宗沙門町元吞空師編輯

### ●增冠 佛祖二經指南

大 全 三 冊 定價五拾五錢  
本 全 三 冊 郵稅貳拾八錢

右ハ古來守遂師の註本あれども約畧向上に過ぎて初學ニ便ならず又道滂師の指南ハ文意を失する所間まあれとも初學の便益却て多きに似たり故に滂師の指南に依る所以なり就中警策の如きの多く舊冠に依り少しく私案を附在して冠首ニ學示す前二經の如きの數部の末註を周羅一是を取り非を去て滂師の失意を補治し以て冠註とし都て婆心の傍訓を加へ數箇の圖解と施して初學に便にす世の利己貪名家の唯に舊版の誤字を正し古冠に増補するものと同日の論にあらざる事諸君乞披閱一識り玉へ

### ●正法眼藏涉典錄

大 全 十 冊 定價金壹圓八拾錢  
本 全 十 冊

此書ハ曹洞宗英傑面山老師撰述ニシテ宗祖正法眼藏ノ事蹟ヲ經律論等ニ據リ廣ク典涉ヲ擧テ集録シ該書ヲシテ一目明了ナラシムル絶世ノ一大珍書ナリ同門ノ僧侶ハ無論各宗ノ賢哲及哲學博士等必ラス一部ヲ座右ニ欠クベカラザルモノナリ請フ試ニ購求瀏覽シ該廣告ノ謬ヲサルヲ証明シ玉へ

明治二十二年一月六日印  
明治二十二年一月六日出  
明治二十三年六月二日縮刷再版



發行者

愛知縣名古屋市門前町十七番戶  
三 浦 兼 助

發行者

京都府下京區第四組辨屋町四番戶  
出 雲 寺 文 治 郎

著 者

愛知縣名古屋市門前町百五十五番戶  
小 澤 吉 行

印 刷 人

全 縣 全 市 傳 馬 町 六 十 番 戶  
山 田 良 彌

大 賣 捌

東京麻布區飯倉五丁目山口屋  
森 江 佐 七

全

東京々橋區三十間堀  
明 教 社

# 大 賣 捌

東京	哲學書院	同	西村九郎兵衛	美濃	大垣	平	流	軒
同	大倉孫兵衛	大	坂橋本徳三郎	同	大垣	岡	安	慶助
同	吉田久兵衛	同	松村九兵衛	伊豫	松山	世	良	藤藏
同	鴻盟堂	同	中村彌七	備後	尾道	三	木	平兵衛
同	三倉鐘三郎	越後	長岡目黒十郎	遠州	見附	朱	宮	記兵衛
同	伊藤清九郎	同	松田周平	同	濱松	齋	藤	傳三郎
同	奥村金二郎	同	水原西村六平	三州	岡崎	伊	藤	小文司
西京	小川多左衛門	信州	長野西澤喜太郎	同	四日市	伊	藤	善太郎
同	大谷仁兵衛	羽後	米澤素月長平	同	同	岩	田	與七
同	西村七兵衛	羽後	横手大澤忠四郎	同	同	津	豐	住謹次郎
同	澤田友五郎	美濃	岐阜溝口彌助	同	三州	豐	橋	高須又次
同	永田長左衛門	同	淺野宗八	尾州	大野	伊	藤	新造
西京	河合卯之助	飛騨	高山大坪善左衛門	兵庫	神戸	船	井	政太郎

